

道徳部会 研究の構想（案）

平成30年度～

I 研究主題

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳の授業はどうあればよいか。

～主として自分自身に関すること～

II 主題設定の趣旨

日本社会はグローバル化や情報化の進展、少子高齢化等、社会の急激な変化がもたらす様々な影響により、将来の予測が困難な時代を迎えている。このような社会で生きて働く知識や力を育むために、「何を学ぶか」に加え、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」といった学びの質の転換が望まれている。そして、その学びの過程となる「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するかが課題となる。

道徳教育においては、「特別の教科道徳」が平成31年度に全面実施となる。他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を育むため、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題として捉え、向き合う「考える道徳」「議論する道徳」へと転換を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すことが大切であると考え。

そこで、これまでの道徳の授業を改めて見直し、「主体的・対話的で深い学び」のある授業にするには、具体的にどのような手立てを講じたらよいかについて研究することが必要であると考えた。改善の視点を「指導する教師が道徳的諸価値をどれだけ深く理解し、授業に臨むか」「生徒が学習課題を自分の問題として捉え、それを多面的・多角的に考えることを通して、人間としての生き方について考えるための手立ては何か」とし、この視点を軸として授業改善に取り組んでいきたい。

本県の生徒の実態を全国学力・学習状況調査の生徒質問紙から見てみると、将来の夢や目標をもっている生徒が全国平均に比べて少ないことが浮き彫りになっている。このような実態から、まずは自分自身を大切に思う気持ちを育てることから始めたいと考え、「主として自分自身に関すること」を副題に設定した。自分自身の内面を見つめることで、真摯に自己と向き合い、自分との関わりで改めて道徳的価値を捉え、一個のかけがえのない人格として自己理解を深め、自己や社会の未来に夢や希望がもてるようにしていきたい。

本研究は3か年を1サイクルとして研究を進めている。同じ内容項目で3年間の研究を行うことで、指導する教師の道徳的価値理解を深めていきたいという意図がある。そのような深い価値理解を基本として、年次ごとに重点研究内容を設定し、焦点化された研究を推進していきたい。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

主として自分自身に関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める生徒を育てるために、実践的研究を進める。

2 研究内容

(1) 年次ごとの重点研究内容

2018年度（平成30年度）…道徳的諸価値の理解を深める発問の工夫

2019年度（平成31年度）…互いに関わり合って道徳的価値の理解を深め合う学習活動

2020年度…自らの成長を実感したり、課題や目標を見付けたりする指導

(2) 道徳の授業を構想するための方策

(3) 道徳の授業に生かす指導方法の工夫

道徳部会 平成31年度研究計画（案）

I 研究主題

主として自分自身に関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳の授業はどうあればよいか。

－互いに関わり合って道徳的価値の理解を深め合う学習活動－

II 主題について

平成30年度より、上記の主題のもと研究を推進している。平成30年度は、「道徳的諸価値の理解を深める発問の工夫」を副題に研究を進めたところ、教師の①主題となる道徳的価値についての理解、②その価値に係る生徒の実態の理解、③教材に対する理解、この3点が、授業の骨格を作る大切なポイントであると再確認することができた。それらを土台に、平成31年度からは「特別の教科道徳」として、さらに研究を推進していくが、昨年度計画した副題から「工夫」を除いた。その理由は「特別の教科道徳」として、これまでの取組から大きな変化を求めるのではなく、基礎に立ち返り、研究の成果を広く継続的に共有していきたいと考えるからである。

平成31年度は、「互いに関わり合って道徳的価値の理解を深め合う学習活動」を副題に設定し、対話的で深まりのある授業の実現を目指す。対話的で深まりのある授業とは、「Aさんの意見は自分の意見と似ている」「Bさんの意見は自分の意見と違う」「今まで〇〇とは～だと思っていたが、本当にそれでいいのだろうか」「本当の〇〇とはどういうことだろうか」などのように他者の意見との共通点、相違点を確かめながら、道徳的価値について自分の考えを広げたり、深めたりすることができる授業である。そのような授業を展開するためには、生徒が問いに対する自分の考えを誰かに伝えたり、他の生徒の考えを聞いたりしたい、という意欲が生まれるように、教師が的確な「問い」を用意し、生徒の多様な感じ方や考え方を引き出すことが求められる。その際、生徒に教えようとするのではなく、生徒の発言を待ち、発言している心の中にあるものを受け止め、受け入れる姿勢が必要である。しっかりと聴き、共に考える教師の姿勢があってこそ、生徒が安心して語ることのできる学級が成立し、本当の「対話」のある授業が実現する。生徒が自ら思考し、発見し、共有し、つながり合う楽しみを感じる授業の実現を目指し、実践的研究を推進していきたい。

加えて、「特別の教科道徳」の全面実施となる初年度に際し、教科化及び改善に至った経緯を理解し、主たる教材である教科用図書の使用を基本にして、年間指導計画に沿った授業実践を心がけていきたい。

III 研究内容とその視点

内容項目の4つの視点のうちの「A主として自分自身に関すること」を中心とした道徳科の授業において、どのように学習活動を行うことで、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に捉える考えを引き出し、道徳的価値や人間としての生き方についての理解や考えを深める授業となるのかを実践を通して明らかにする。

互いに関わり合って「主体的・対話的で深い学び」のある授業を行うには、指導する教師の道徳科の特質や道徳的諸価値に対する深い理解、教材分析に基づいた発問構成の吟味等、道徳教育及び道徳科の目標を基盤とした全体的な授業構想の在り方が大切な視点となる。また、表面的、形式的な議論や話し合い活動に終始せず、本当の「対話」へと導くための学習活動の在り方についても同様に大切な視点となる。更に、本年度からの教科化実施に伴い導入される評価についても研究に取り組む必要がある。このような視点に基づき研究実践を行い、継続的な研究につなげていきたい。

1 道徳科の授業を構想するための方策

(1) 道徳科の特質を生かした学習指導の展開

- ・特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたずに言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にある。道徳科の目標を正しく理解した上で、教材を吟味し、道徳的価値を学習指導要領解説と照らし合わせたり、複数の教師で検討したりしていく必要がある。
- ・生活体験や教材の感想を発表するだけの活動や道徳的価値の観念的・一面的な理解に終始することなく、生徒自身が人生の課題や目標に向き合い、道徳的価値を視点に自らの人生を振り返り、これからの自己の生き方を主体的に判断するとともに、人間としての生き方について理解を深めることができるよう支援する。
- ・教師が生徒と共に人間の弱さを見つめ、考え、夢や希望等を語り合うような姿勢を大切にす

- (2) 教材分析と発問の吟味
- ・以下の例のように教材を分析し、授業を構想する。その際、分析した結果を図や表等に表して可視化しておく、分析結果の共有や研究成果の蓄積に役立つ。
 - 一例 ①生徒に考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討する。
 - ②中心的な発問と予想される生徒の反応、補助発問を考える。
 - ③中心的な発問以外の場面の発問と予想される生徒の反応を考える。
 - ④本時のねらいを設定する。(教材の活用、内容項目の焦点化、道徳性の諸様相)
 - ・生徒の思考を予想し、それに沿った発問や、考える必然性、切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考えさせる発問等となるよう工夫する。
 - ・生徒が更に深く考えられるように、補助発問や問い返し、つなげたり深めたりする問いを準備する。
- (3) 対話的で深まりのある授業
- ・話し合いは、生徒と教師、生徒相互の対話の深まり、議論の深まりが、生徒の見方や考え方の高まりを促すことから、課題に応じた活発な対話や議論が可能になるよう工夫する。
 - ・議論する場面を設定すること、ペアや少人数グループなどでの学習を導入することが目的化してしまわないよう、ねらいに即して、取り入れられる手法が適切か否かをしっかり吟味する。

2 指導に生かす評価の充実

道徳科のねらいと評価の意義を知り、「道徳科の評価は生徒の授業における学習状況や道徳性に係る成長の様子について、継続的に把握したことを個人内評価として、記述式で行う。道徳科の授業に係る生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、生徒が学習したことの意義や価値を実感できるように励ますために評価を行う」とする評価の基本的方法を理解した上で、各生徒の評価文を書く必要がある。生徒がよりよく生きようとする思いを励まし勇気付ける評価とはどのようなものであるのかについて研究を進める。

(1) 評価の方法

道徳科の授業における各生徒の学習状況と道徳性に係る成長の様子について、どう見取り、どう蓄積するのか、評価の妥当性、信頼性を担保するために、各郡市、学校ごとに組織的、計画的に研究と実践を行っていく必要がある。生徒の成長の様子を見取る材料としては次のようなことが考えられる。

一例 ・発言した内容(授業記録、板書の記録写真等の活用)

- ・感想や学んだことを記述した内容、生徒の自己評価(道徳の授業ノート、学期ごとの振り返り等の活用)
- ・態度の観察(取り組みの様子、対話的な姿勢の有無についての観察記録、発言や表情から、授業内容を自分事として考えている姿勢の有無について観察記録)

(2) 評価の留意点

- ・評価文が生徒を励ますような内容となるよう、生徒一人一人への理解が適切であるかどうか、振り返りに努める。
- ・生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を、指導の目標や計画、指導方法の改善・充実に生かすように努める。

IV 研究方法

- 1 前年度までの研究成果の蓄積を確認した上で、研究の継続性を意識し、本年度の研究主題を主体的に受け止め、各学校で日々の実践活動を通して主題の解明に努める。
- 2 各学校での実践資料や成果等を持ち寄り、各郡市、地区で研究を深める。
- 3 各郡市、地区ごとに研究の視点を明確にし、研究授業、研究協議を通して、指導法の実践的研究を進め、主題の解明に生かす。
- 4 各郡市、地区の研究結果を踏まえ、情報を交換し、次年度以降の研究に生かす。

